

2025 年度「白百合 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」自己点検・評価報告書

2026 年 6 月 21 日

白百合女子大学データサイエンス教育運営会議自己点検部会

1. 自己点検・評価実施体制

原則として年に一度、プログラム実施主体「白百合女子大学データサイエンス教育運営会議」より選出されたメンバーにより「自己点検部会」が開催される。そこで、授業評価アンケートおよび成績評価・出席状況等を元に自己点検が行われ、結果は「白百合女子大学データサイエンス教育運営会議」に報告されさらなる点検・評価を行う体制を取っている。

2. 対象

2025 年度に開講された選択必修科目「はじめてのデータサイエンス」（オンデマンド授業・2023 年度以前入学者対象・全 2 クラス）および全学必修科目「はじめてのデータサイエンス」（対面授業・2024 年度以降入学者・全 10 クラス）

3. 点検・評価項目

学内からの視点

（1）プログラムの履修・修得状況

在学生の約半数が修得済みの状況にある。2024 年度に全学必修とした効果が出ていると考えてよい。

表 1 全学生数に占める「白百合 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム」修得者割合の推移

年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度
	3%	9%	29%	50%

（2）学修成果

最終テスト後に実施する授業評価アンケート（学生からの視点・間接評価）、それに加えて、最終テスト結果・成績評価（直接評価）の面から学修成果を把握している。授業評価アンケートでは「私はこの授業の到達目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ」という設問において「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は 88%であった。2024 年度の 89%と比較してもほぼ変わらぬ水準を示しており、また「私はこの授業についてわからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた」において「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した割合が 79%であったことと合わせて考えても主体的に本プログラムに取り組む姿勢は総じて高かったと評価してよい。また、単位修得率は約 9 割弱となっており、学修成果は十分に出ていると判断できる。

(3) 授業評価アンケート等を通じて把握された学生の内容の理解度

「私はこの授業の到達目標を達成できた」という設問に対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した割合は 64%であった。(2024 年度は 70%)「どちらともいえない」(25%)「どちらかといえばそう思わない」(8%)「そう思わない」(3%)を合わせると、3 人に 1 人程度の割合で授業内容の理解に不安を持っている状況がうかがえる。しかしながら、上述の通り単位修得率は総じて高く、テスト等を通じて把握された理解度と学生の感覚的な理解度のズレがあるように思われる。

(4) 授業評価アンケート等を通じて把握された後輩等他の学生への推奨度

「この授業を他の学生にも勧めたい」と答えた学生は「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせて 81%に上った。「全体としてこの授業を受けてよかった」という設問に対しても「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせると 96%の学生が高い評価をしていることから、推奨度は高いと考えてよいだろう。

(5) 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

2024 年度からの全学必修化により履修者数は計画通り増加している。

学外からの視点

(1) 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本プログラム開始が 2022 年であり、また当初は受講者が少なかったこともあり、まだ実質的に活躍状況調査を行える段階ではない。しかしながら 2025 年度卒業生に対して行われた、数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム関東ブロック企画推進ワーキンググループ企画の「MDASH 認定制度に関する卒業生向けアンケート」における本学卒業生の回答結果を見ると、本学卒業生の全回答者 5 名のうち、4 名が卒業後の進路を「情報通信業」と回答していることがわかる。本プログラムの習得は進路に少なからぬ影響を与えていると言えるだろう。

(2) 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

IT・情報教育に携わる企業のご担当者様より次のような意見をいただいている。「2024 年度は MOS-Excel（一般レベル）を中心とした受験構成でしたが、2025 年度にかけて、Excel エキスパート(上級レベル)やビジネス統計スペシャリスト(統計基礎と Excel データ分析)の受験者が増加し、受験者の分布がより高度で実践的な領域へと広がってきています。基礎的な Excel 操作の習得を起点に、その応用や統計・データサイエンス分野へと段階的に発展している様子がうかがえます。今後のさらなる充実を期待しています。」

教育方法の工夫・改善

(1) 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること
「AIにも様々な種類があり、目的によって使い分けられていること、現在も進化が続いていることが分かった。データサイエンスのイメージは「サイエンス」の言葉の影響で理系のように感じられていたが、文系でも必要な能力だと思った。」「出身高校がAI活用に前向きな方針を示していたこともあり、AIについては前向きでパートナーで手綱を握るような感覚でいればいいと思っていたが、大学のレポートで不正ができるなど高校のころとはまた違う使い方や不正に気付いて価値観をアップデートしないといけないと本授業でAIの特性を学んで思った。」といった自由記述が授業評価アンケートでは見られた。加速度的に進歩するAIに接し、学び続けることの意義を理解した学生が多かったことが推察されよう。

(2) 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

「あなたにとって、この授業の難易度（1～5段階）を教えてください」という設問にたして、「やや難しい」と答えた学生が46%、「とても難しい」と答えた学生が16%と、約6割の学生にとっては難易度が高い授業であったことがうかがえる。そのため、授業内容の復習に役立つよう別途動画を作成し、いつでも見ながら反復できる体制を取っている。本授業では毎回、manabacourseの小テスト機能を用いて授業内容の理解度を測っているが、今後はより詳細な設問分析（正答率など）を踏まえた分析と、それに応じたきめ細かなフォロー体制を充実させる必要もあるだろう。

4 総括

「(3) 授業評価アンケート等を通じて把握された学生の内容の理解度」において、授業内容の理解に不安を持っている学生の多さが指摘されたが、一方で、授業内容の適切さに対しては高い評価がうかがえるのも事実である（「この授業の内容は適切だったか」という問いに対して「そう思う」51%、「どちらかと言えばそう思う」37%）。授業の教材や資料の適切性にたいしても評価は総じて高い（「この授業の教材や資料は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった」に対して「そう思う」56%、「どちらかといえばそう思う」35%）。「教員は授業のフィードバック、学生からの質問への応答を適切に行っていた」に対しても「そう思う」(64%)、「どちらかと言えばそう思う」(28%)と、授業内容や教材、教授方法について、学生からの不満はさほど見られないと言える。それにも拘わらず、自らの理解度に不安を抱える学生が一定数いる現状に対してどのようなアプローチが必要なのか、検討が望まれる。また、必修科目であるにも関わらず単位を落とす学生の割合が全体の約1割程度存在する状況には、大学全体における傾向とも合わせて対応が求められていると言えるだろう。

以上